2014 年 12 月 10 日
（特活）名古屋 NGO センター

2014 年度 NGO・外務省定期協議会「第 2 回連携推進委員会」
NGO 側協議事項　資料

中部地域において、国際協力活動を下支えしている草の根ボランティア市民組織（小規模 NGO）支援の意義と可能性

NGO の存在と役割が国際的に認知されて久しい。グローバリゼーションがすすみ、地球規模課題への取り組みが混迷する中で、国家間の話し合いの困難性と限界が露呈し、NGO が非政府・非営利の市民社会セクターとして、とるべき役割と行動が鍵となってきている。

ここでいう NGO に小規模 NGO も含まれることを確認しつつ、小規模 NGO 支援の意義と可能性を明らかにして草の根ボランティア市民組織（小規模 NGO）支援の具体的な方策を検討する端緒としたい。

ODA が単独ではできない領域を NGO や企業との官民連携でより効果的なものにする努力がなされてきた。大・中規模 NGO との連携がすすんだが、その時流に乗らない NGO とりわけ小規模 NGO は蚊帳の外であった。最近の動きとして、小規模 NGO との連携が検討されはじめている。支援を受けてやがては中規模へとステップアップしていきたいと願う小規模 NGO にとっては朗報である。ここで取り上げるのは、それ以外の小規模 NGO である。

・草の根ボランティア市民組織
・主に国内の国際的な課題に取り組む NPO
・これから生まれる小規模 NGO

これらは、NGO ならではの独自性・先駆性が身上であり、現行支援事業の小型化・簡素化では器に合わず、それぞれの特性に合った支援枠組みを備えてこそ、それらの NGO との連携が日本の国際協力の効果を高めるものとなる。一つ一つは小さいが全国の草の根に点在するこうした小規模 NGO は数の上ではたいした社会的勢力といえる。潜在化しているものを顕在化させ、真の国際協力の推進にその力を活かしていくことは大きな課題のひとつである。

１．草の根ボランティア市民組織

法人化していても専従職員や独立した事務所を持たない。NGO の職業集団を目指さず、生活の糧は別途に求めて、二足のわらじで身の丈に合った規模と方法で、地道で持続的な国際協力活動を進めている。長年関わっているとそれなりに現地に精通し、国内においても活動する国やイシューに関して人脈がある、といったタイプである。国内では暮らしの場や職場を基点にして活動しているので、周囲の人にはその顔で認知されている。

特色１：「草の根の人たちに密着」型の開発実践

開発の原点は人間である。

草の根の人たちに密着する活動の特徴は：

相手の困難に関わる活動

相手のことを思う気持ちに溢れた活動

実は相手との葛藤が生じやすい活動（資金が絡んだ関係性、協働であるため）

結果の見えにくい仕事（種まき、バトンをつないで渡す）

関わりに裁量の幅がある活動

固有性の強い、計画通りに行かない活動領域である。社会開発分野に福祉的要素が濃厚に融合する、ケースワーカー的関わりが必要とされる。小規模 NGO だからこそ取り組める領域である。短期的なプロジェクト目標達成と、長期的な人づくりとの兼ね合いが鍵である。納税者へのアカウンタビリティとして目標達成は必須であるが、計画通りに実行して成果をあげることを目的化し、後者がおろそかにならざるを得なくなってしまっているとしたら、その成果は偽りの成果でしかなく、活動が疲弊してしまうことになる。NGO 支援事業としては本末転倒である。「長続きする関係は、結果的にお互いがぶれていない。」と述懐する。プロジェクトだけを切り取ってその実行と結果をみて成果を測ることには限界がある。両者の兼ね合いの重要性を押さえた新たな計画～評価方法を検討する必要がある。

特色２：軌道を敷いたアプローチよりも、出会い系アメーバー的アプローチが得意

（事例）フィリピンで主に植林活動を行なっていた NGO が、東日本大震災の被災地支援。支援していた当事者の女性たちがグループ活動を通して NPO を立ち上げるまでになった。その後フィリピンに大型台風がきて活動地が被災。東北支援に関わった物資を提供する NPO が支援を申し出て、連携してフィリピンの被災地支援に当たる。その後、東北で垣間見た農村での６次産業化の動きをフィリピンの活動地にも導入し、野菜の生産・加工、町にアンテナショップを設けて販売に結びつけ経済自立・生活改善・地域活性の道筋を試みている。

現場のニーズと、ほっとけない心と、出会いが揃うと偶然が必然に変わっていく。ヒト・モノ・カネ・情報・知識・経験の不足を補いながらニーズに応えていくための現実的な方策であり、何度か経験すると、小さな枠内に縮まらない、出会いとプロセスを愉しむゆとりと期待感、そこから刷新的で新たな取り組みが実現していく。この醍醐味を生み出す体質をどのようにプロジェクト支援の中に生かしていけるのか、また、この体質をより強化して、現地の人たちも同じように周囲にあるリソースを生かして新たな取り組みを生み出せるのか、

社会的意義１：草の根外交

人の心に焼きついたものは、世代を超えて語り継がれ、学んだことは行動を通して受け継がれていく。活動地から聞こえてくる日本の NGO に寄せられる声は、一様に日本人に対する

高い評価である。「誠意をもって熱心に関わり、でしゃばらず、押し付けず、長きに渡って変わらずに支援し続け、私たちはやりたいことができた。仕事ぶりや生活態度から多くを学んできた。」学びは人から、信頼は関係性から生まれ、豊かな心の交流がある。たとえ小さな営みであっても、1 人の人間の思いと発心と行為が及ぼす力の大きさは計り知れない。同様に日本人側も多くの学びを得、感化され、感銘を受けたことをまわりの人たちに伝え、顔の見えるつながりの輪を広げていく。損なわれることの無い、強い絆がある。こうした草の根外交がより多くの地で進められることが望まれる。

社会的意義 2：平和をつくりだす人間の安全保障

戦争がないこと、武力で相手勢力を抑えることが平和ではない。開発実践が功を奏してみんなが衣食住足りて、助け合って暮らしていける地域づくりを国境を越えてすすめていくことは平和の礎である。相手のことを思いやり、心を交わし信頼関係を深めていく開発実践は平和の担い手づくりでもある。

社会的意義 3：公共を担う良き市民

利他的精神で　弱い立場におかれた困難な中にいる人たちに働きかけ、暮らしよい社会の実現に向けて共に助け合おうとする在りかた、人任せにせず自分たちでできることは自分たちで解決しようとする生き方はロールモデルとなって周りの人たちにとって大きな刺激となっている。

社会的意義 4：社会関係資本を豊かにする

国境を越えて共に心を通わせ、協同して社会づくり励むことは、国境を越えた国際的な社会関係資本を豊かにさせるだけでなく、人間関係が希薄になりつつある日本の地域再生にもつながる。

こうした小規模 NGO に必要な支援１：補完性の原理

応えるべき現地のニーズには、小規模 NGO の力を超えた規模・内容のものがある。必要な時に必要な分だけアクセスできるとより大きな成果が生まれ、活動は大きく飛躍できるという時がある。

こうした小規模 NGO に必要な支援 2：３J

ノーベル賞学者を続々と輩出している名古屋大学。躍進の背景には、「自由」「地道」「地元愛」という３つの J だと指摘されている。自由闊達で風通しのよい学風、自主性が尊重され、学生が臆さずにチャレンジできる雰囲気がある。人間関係がフラットで、学部間の垣根が低く、学際的な体制。そして、こつこつと粘り強くカイゼンを積み重ねていく地道な努力。地の利を生かした地域連携。３J の国際協力版が望まれる。

２．主に国内の国際的な課題に取り組む NPO

1980 年代、身近な国際協力をすすめる草の根のボランティア組織が立ち上がるきっかけになったのは、苦学する留学生との暮らしの中での出会いであった。日本での生活支援に始まり、留学生の帰国後の志に共感し、実現に向けて支援する国際協力である。その後、国内にはさまざまな立場で外国にルーツを持つ人が無視できない数に増加し、日本社会は多文化共生社会となっている。エンターテイナーや安い労働力として 3K 労働に従事する外国人労働者や技能実習生、難民など、住民の暮らしとは距離があり接点が無く隠れたところで従事しているため、また、偏見や誤った情報による恐怖心から近隣の助け合い的な自然な形での国際協力はあまり見受けられない。パスポートを取り上げられて監禁状態で働かされているホステスの救出といった特殊な関わりから、その後、定住化がすすみ、日本語教室や子どもの教育の問題、外国人の集住地域と近隣住民との共生の問題など、身近で差し迫った問題に取り組む活動が起こってきている。多文化共生は総務省や地方自治体が主に担ってきた。

最近の大きな注目点は、そういった外国にルーツを持つ人たちの新たな行動とその意義である。いくつかの事例を挙げると：

- 農村の男性と結婚した外国人女性による社会的起業が、同じ境遇にある女性のネットワーク化・雇用の創出にとどまらず、限界集落化傾向にあった地域の活性化・起死回生の地域再生につながる農村の救世主的存在になっているというケースが起こっているという事実である。
- 同国人が集まって自助組織をつくり、各人の便宜を図ることから公共的なことにも活動を広げて、東北の震災の折にはお金を出し合って救援に駆けつける、出身国の被災には現地の NGO を通して救援活動する、多文化共生推進のイベントなど開催するといった NPO 活動を活発にすすめている。日本人が彼らに何かをしてあげるという関係から、彼らが日本人や日本社会に対して大切な役割を担って自主的に活動するという関係に変わってきている現象が見られる。
- あるいは、在日の同国人が中心となって NGO を立ち上げ、本国の貧困女性の自立支援をおこない、合わせて地場産業化を通して地域の活性化と日本での販売を通した同国の特産品づくりをすすめ、やがては帰国する仲間の再定住化と、日本に出稼ぎに来なくてもよい環境づくりが構想されている。
- また、これまでは構造的な経済格差から劣悪な労働環境であっても多くの外国人労働者が日本に押し寄せる買い手市場であったが、日本経済の低迷・国際労働市場の流動化の元で、外国人労働者のほうが働く場所を選ぶ売り手市場に転換し、少子高齢化にあって外国人労働者に依存していた日本経済の行方が危ういものになってきている。

こういった大きな変化の兆しの中で、活発な外国にルーツを持つ人たちの活力を取り込み、国内活動にとどまっていた多文化共生の動きを海外の出身国での取り組みをも視野に入れた国際協力の観点で両者をつなぎ、両国地域の活性化と経済の発展への好機を先取りすること

が必要ではないだろうか。
・そうなれば難民問題の取り組みにおいても、現地と国内の取り組みが別々になっているものを統合してとらえ、連携し、難民化を未然に防ぐことにもつながる可能性が開かれる。

３．これから生まれる小規模 NGO

以上、利他的精神とグローバルな視点で、国際協力活動をすすめる草の根のボランティア組織の存在意義は大きいが、少子高齢化、厳しい日本経済、それに伴う若い世代の厳しい現実、結婚後も労働市場に駆り出される女性、など国際協力の担い手問題は深刻である。介護や子育てなど個人的な事柄が社会的な対策として取り組まれる現在、国際協力の担い手問題は、近未来の大きな社会問題である。２で述べたように、これからは、定住外国人にも門戸を開き、時代のニーズをつかんだ活動は、積極的に支援し、育てていく姿勢が望まれる。

また、特に若い世代が自由な発想で挑戦する機会が備えられており、情報、メンター、資金提供などの資源が地域ごとに整えられているような、地域単位の環境整備が望まれる。各セクターの地域連携が欠かせないが、中心的な役割を担うのはネットワーク NGO であろう。市民参加の枠組みの中でも、国際協力に関心を持って活動に参加する、ということと、NGO を立ち上げるということを区別してとらえ、NGO 立ち上げに向けて必要な支援的環境を整えていくことが望まれる。

以上